浜松医科大学医学部附属病院 広報誌

はんだ山の風

2026 AUTUMN
第64号



卒後教育センター

2026年 初期研修医

安心して学べる環境と充実した学びの中で、一歩ずつ成長を重ねています。

Contents

P.2 『研修医の成長を支える環境と学び』 卒後教育センター

P.4 シリーズ最新医療Vol.47
小児科『子どもの発達の遅れ・発達障害と遺伝 —— 遺伝学的検査からわかること』
小児科　助教　平出 拓也

P.6 看護部『「食べる」を支える　「生きる」を支える
～「食べたい」想いに寄り添うチーム医療と看護の挑戦～』
看護部　摂食嚥下障害看護認定看護師　清水 翔太郎

P.8 病理部『顕微鏡の向こう側を診る —— 確かな医療を支える病理診断』
病理部　部長　目黒 史織

P.10 在浜松ブラジル総領事館に行ってまいりました!

P.10 迷惑行為の防止に関するお願い

P.11 医療福祉支援センターニュースかけはし
『脳卒中・心臓病等総合支援センター「ハートの日」ライトアップについて』

P.12 イベント レポート　7/14(火) サマーコンサートを開催
7/30(木)・31(金) 親子で学ぼう!感染対策2026を開催

P.12 浜松医科大学 地域連携Webセミナーのご案内(第59・60・61回)　医療福祉支援センター地域連携室

Japan Council for Quality Health Care
日本医療機能評価機構

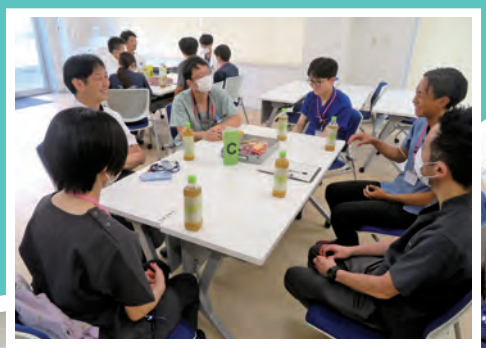
当院は日本医療機能
評価機構認定病院です。
(一般病院3)

外来担当医一覧は▶
こちらから

卒後教育センター

メンター制度について

メンター制度は、研修医が進路や研修のこと、個人的な悩みなどを気軽に相談でき、安心して研修に取り組めるよう2025年度から導入した制度です。2026年度は若手からベテランまで21名の医師がメンターに応募しました。研修医はプロフィールを参考に、自分に合ったメンターを選びます。顔合わせ会や交流会を通じてメンターと研修医のつながりを深めており、今後も研修医が安心して成長できる研修環境づくりに努めてまいります。





実際に患者さんを診療し、自分の言葉や行動が患者さんの安心につながったと思えたとき、医師になってよかったと実感します。これからもひとつひとつの経験を大切にし、信頼される医師を目指します。

研修医の成長を支える環境と学び



医師となり、早くも数ヶ月が経過しました。毎日、素晴らしい指導医の先生方からご指導をいただき、充実した研修生活を送っています。今後とも初心を忘れず、患者さんに安全な医療を提供できる医師を目指して努力を重ねてまいります。







レジデントセミナーについて

毎月２回、各診療科の医師やメディカルスタッフを講師に迎え、研修医向け勉強会「レジデントセミナー」を開催しています。実臨床に即した知識や、手技を交えた実践的な講義に加え、論文検索や英語プレゼンテーションなど大学病院ならではの学びの機会も設けています。研修医の意見や要望を取り入れながら多彩なテーマを扱うほか、上半期・下半期ごとに研修医の投票で選ばれた講演を表彰し、学ぶ意欲を高めるとともに、より充実した学びの場づくりにつなげています。

シリーズ 最新医療 Vol.47

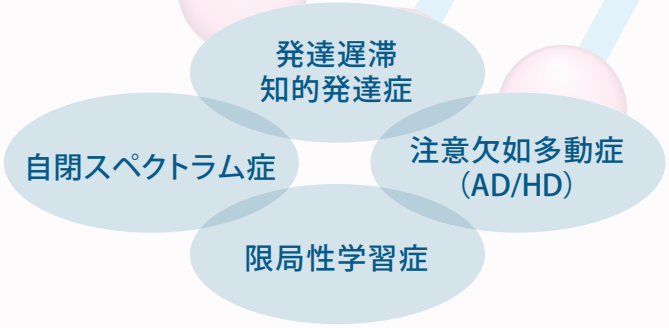
小児科

子どもの発達の

発達の遅れ・発達障害とは?

いわゆる発達障害は、現在「神経発達症」と呼ばれています。神経発達症とは、生まれつきの脳の発達の特性によって、言葉や学習、コミュニケーションなどに困りごとが生じる状態です。これは脳機能の特性によって引き起こされるものであり、育て方や環境によって生じるものではありません。

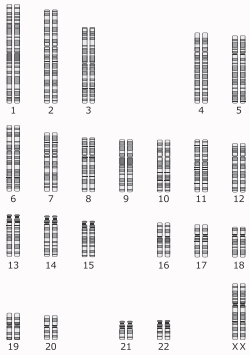
その特徴や程度は一人ひとり異なり、成長とともに変化することもあります。



神経発達症にはさまざまなタイプがあり、
それぞれの特徴が重なり合うこともあります。

遺伝子ってなに?

遺伝子は、体をつくる「設計図」です。約２万種類の遺伝子があり、脳や心臓など体のさまざまな働きを支えています。人間の細胞には、父親と母親から半分ずつ受け継いだ23対（計46本）の染色体が入っており、世代から世代へとその性質が伝えられます。





DNAは、細胞の中では小さく折りたたまれ、染色体として収められています。
DNAには、体をつくるための情報をもつ遺伝子があります。
※引用:Togo Picture Gallery(c)2016 DBCLS TogoTV/CCBY-4.0

神経発達症と遺伝子

神経発達症には、遺伝子が関係していることがあります。現在では、神経発達症に関係する遺伝子が数多く見つかっています。遺伝子だけではなく、環境などさまざまな要因が関係している場合もあります。



遺伝学的要因
環境要因



血液を用いて検査

1～7ml程度採血
▼
DNA抽出
▼
遺伝学的解析
▼
結果を
主治医から説明





遅れ・発達障害と遺伝 ― 遺伝学的検査からわかること

小児科　助教　平出 拓也

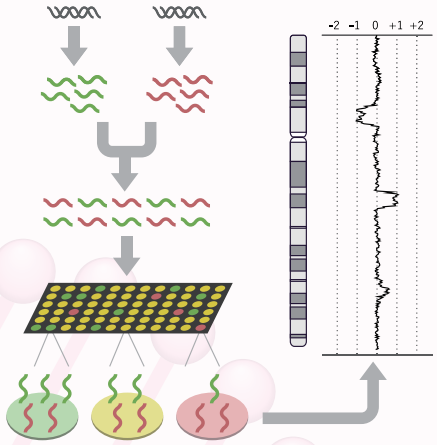
遺伝学的検査にはどんな種類がある?

臨床診断からどの検査を行うか、選択していきます。

想定される鑑別疾患に応じた検査	網羅的遺伝学的解析
G-band染色体検査 FISH検査 サンガーシークエンス 疾患パネル検査 メチル化解析 リピート解析	マイクロアレイ染色体検査 エクソーム解析 全ゲノム解析(研究)

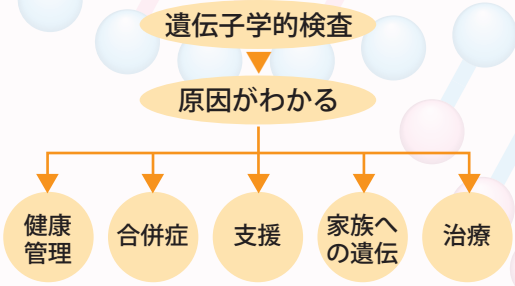






遺伝学的検査で何がわかる?

- 症状の原因がわかることがあります
- 病気によっては、注意すべき合併症や定期的な検査など、健康管理に役立ちます
- 病気の特徴を理解することで、療育や福祉サービスなどを検討する際の参考になります
- 兄弟姉妹への影響について説明できる場合があります
- 一部疾患では、すでに遺伝子治療が始まっています
- ただし、現在の医学では原因がわからないこともあります



検査を考える症状は?

このようなお子さんでは、遺伝学的検査を考えることがあります。

- 発達の遅れが目立つ
- てんかんの症状がある
- 生まれつき心臓病や腎臓病などをともなっている
- 顔立ちや手足などに特徴がある
- 複数の臓器に症状がある
- 家族に似た症状の方がいる



IRUD(未診断疾患イニシアチブ)

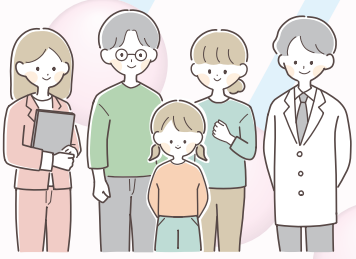
IRUDでは日常の臨床現場で診断が難しい患者さんを対象として、遺伝子を幅広く調べる検査を行います。そして、患者数の少ない病気や新しい病気の原因解明と診断を行い、治療を届けることを目的としています。

本院は、IRUD拠点病院に指定されており、診断が難しい患者さんのご紹介を受け付けています。

遺伝カウンセリングとは?

遺伝カウンセリングは、遺伝性の病気や遺伝学的検査について、医師や遺伝カウンセラーと一緒に考える相談の場です。

病気や遺伝の仕組み、検査でわかること・わからないこと、家族への影響などについて説明を受け、十分な情報を得たうえで、安心して今後のことを考えられるよう支援する大切なプロセスです。



検査の先にあるもの

遺伝学的検査の目的は、病名をつけることではありません。

お子さんの特徴をより深く理解し、一人ひとりに合った医療や支援につなげることが、最も大切な目的です。



看護部

「食べる」を支える　「生き

認定看護師としての原点

「食べられないなら、死んだ方がマシだよ」

手術が成功し、退院を目前に控えた患者さんが放った言葉です。入院生活による体力低下で嚥下機能が落ち、自宅でもペースト食しか食べられないと告げられた際の一言でした。

当時、まだ看護師として経験の浅かった私の心に、この言葉は強く刺さりました。患者さんは病気を治すためだけに病院に来ているのではない、その先にある「今まで通りの生活」を望んでいる。そして、その生活の基盤には「食事」があるのだと痛感した出来事でした。

急性期病院で診療の補助に追われる日々の中、「看護師として、もっと患者さんの『食』に対してできることがあるのではないか」。この自分への問いかけが、私が摂食嚥下障害看護認定看護師を目指した原点です。

急性期の課題と多職種チームアプローチ

急性期病院では、疾患そのものの影響に加え、治療にともなう安静や絶食によって短期間で急激に身体機能や嚥下機能が低下してしまう「医原性廃用」が大きな課題となります。「病気は治ったけれど、食べる力が落ちてしまった」という状態を防ぎ、早期から安全に口から食べる取り組みを進めることが、今の医療には強く求められています。

本院では、こうした課題に対し、医師・看護師・言語聴覚士・管理栄養士・歯科衛生士・薬剤師といった多職種で「摂食嚥下サポートチーム」を結成し、組織横断的に活動しています。嚥下造影検査（VF）などの専門的評価を踏まえ、患者さん一人ひとりに合わせた最適な食形態やアプローチ方法を提案・実践しています。

食支援における看護師の役割

そして、この食支援の核となり、現場で最も重要な鍵を握っているのが看護師です。看護師は24時間365日、患者さんを最も近くで支える「療養生活支援の専門家」です。検査室での一瞬の評価にとどまらず、「日々の体調」「姿勢の調整」「一口ごとの表情や発声の変化」「食事にかかる時間や疲労度」など、実際の生活の場での変化をタイムリーに捉え、患者さんの力を引き出して食支援に活かせるのは、看護師にしかできない最大の強みだからです。

挑戦：食支援ナースの体制の導入と成果

本院の脳神経センター病棟では、看護師の食支援における役割を最大限に発揮するために、「食支援ナース」の体制構築と導入に取り組みました。食支援ナースとは、「食事介助」を最優先業務とする役割業務です。食事介助時はナースコール対応も他のスタッフに任せ、食支援が必要な患者さんと「しっかりと時間をかけて向き合う」環境を整えました。単にスプーンを口に運ぶのではなく、「どうすればこの患者さんが安全に、おいしく食べられるようになるだろうか」と、嚥下機能だけではなく、意識・呼吸・認知・耐久性・嗜好など、多角的な視点で観察・考察しながらケアを実践する役割です。

この業務改善により、介助が必要な患者さんの食事摂取量は明らかに増加しました。また、患者さんが自分の口で食べられたときの笑顔や、摂食状況の変化を間近で実感する



ことで、看護師自身の食支援に対するやりがいと意識が向上したことは、嬉しい結果でした。

食べる喜びを諦めない

認定看護師として現場の仕組みを整え、看護師が患者さんの「食べたい」に本気で向き合える環境を作ることこそが、安全で効果的な食支援の要、ひいては生活支援の要になると考えています。

「食べる」ことは、「生きる」ことそのものです。厳しい入院治療の中でも、患者さんの「食べたい」という思いを決して諦めずアプローチしていくことが、その人らしい生活と尊厳を支えていくことになると信じています。

私たちはこれからも多職種と深く連携し、専門性を活かした看護の実践を通して、患者さんとご家族の「食べる喜び」に全力で寄り添っていきます。

摂食嚥下障害看護認定看護師
清水 翔太郎



摂食嚥下サポートチーム
(SST:Swallowing Support Team)の多職種メンバー
口から食べるために必要な支援を、
それぞれの専門的な視点から話し合います

今日から始める「のどトレ」！

いつまでも元気に食事を楽しむカギは「喉(のど)の筋力」にあります。飲み込みには口や喉のさまざまな筋肉が関わっていますが、その中でもあごの下にある筋肉は、飲み込む時に「のど仏」をグッと持ち上げ、食道の入り口を開く重要な役割のある筋肉です。喉の筋肉を鍛えて誤嚥を予防するために、今日からできる簡単なトレーニングにチャレンジしてみましょう!



嚥下訓練①：開口訓練

①安定した姿勢をとる
②あごが痛くない程度に最大限に口を開ける
③あご先から喉にかけて力が入っているか、触って確認する(写真)
④力が入った状態で10秒間キープ!
⑤10秒休憩
⑥これを5回繰り返し、1日2セット行う



開口訓練【強化】

●テーブルに肘をついて手のひらにあごを乗せる
●あごで手のひらを押すイメージで、できるだけ頭が上がらないようにしながら、口を開けるように力を入れる



嚥下訓練②：嚥下おでこ体操

①安定した姿勢で座る
②テーブルに肘をつき、額(おでこ)に手のひらを当てる
③おへそをのぞき込むイメージで頭を下げる
④額と手のひらで、お互いに10秒間押し合う(持続訓練)
⑤1～ 10まで数を唱えながら、それに合わせて下を向くように力を入れる(反復訓練)
⑥ ④·⑤を1セットとし、1日3セット行う



病理部

病理部の役割

病理部では、患者さんから採取・切除された組織や細胞を顕微鏡で詳しく調べ、病気の種類や広がりなどを診断しています。この病理診断は治療方針を決めるうえで大切な情報です。そのため、病理医と臨床検査技師が協力して運営に当たっています。

仕事の魅力

患者さんと直接対面する機会はほとんどありませんが、患者さんの体から実際に採取された組織や細胞を観て病気の正体や特徴を読み解き、その結果が治療に繋がっていくことにやりがいがあります。表舞台には立ちませんが、多くの診療科と連携・協力し、医療を支えています。



難解例は、複数名の病理医で検討しています。

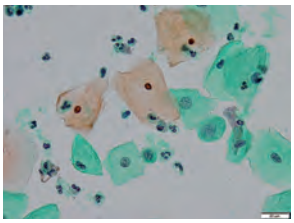
検査の種類について

病理組織診断

手術や生検などで採取された組織を顕微鏡で詳しく観察し、病気の種類、状態、進行具合などを診断します。

細胞診

粘膜の表面、痰や尿など体の中から採取した細胞を顕微鏡で調べる検査です。がん細胞の有無や感染症などを確認します。身体への負担が比較的少なく、検診にも用いられます。



病理解剖

亡くなられた患者さんのご遺体を詳しく調べ、病気の広がりや治療の効果、死因などを明らかにし、解剖で得られた知見は、今後の診療や医学の進歩に役立てます。



病理診断の流れ & 病理組織診断の標本作製

検査や手術で患者さんから採取された組織が病理部に提出されます。



固 定

採取した組織が変性しないように、ホルマリンなどで固定します。



切り出し

固定された組織の病変部を確認し、顕微鏡で観察するべき部位を切り出します。



包 埋

切り出した組織をパラフィン（蝋）に埋め込み、薄く切れるように固めます。



こう側を診る ― 確かな医療を支える病理診断

病理部　部長　目黒 史織

病理部が行う多彩な業務

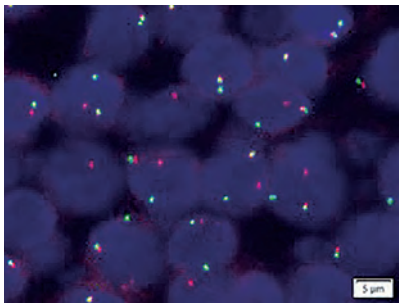
術中迅速診断

手術中に採取された組織を短時間で調べ、病気の種類や切除範囲などを確認する検査です。限られた時間の中で病理医が診断し、その結果が手術中の方針決定に役立てられます。



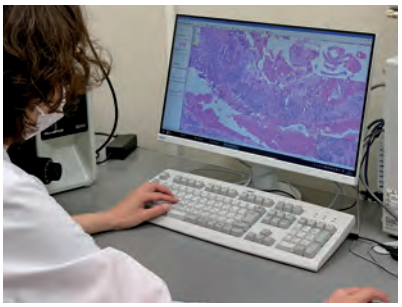
遺伝子・分子病理学的診断

FISH法やPCR法、シークエンス解析などを用いて、組織や細胞の中にある遺伝子・染色体の変化を調べています。これらの検査は病理診断に有用なだけでなく、治療薬の選択や治療方針の決定にも貢献しています。



病理組織バーチャルスライド

組織標本をデジタル化し、院内配信しています。標本をモニター上に表示することができ、カンファレンス等に使用できます。また、病理医が不在の医療機関では、バーチャルスライドを利用した遠隔病理診断にも役立ちます。



薄 切

固めた組織を専用の機械で3～4ミクロンの薄さにスライスします。



染 色

薄く切った組織に色をつけ、細胞や組織を見やすくします。



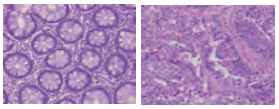
標本完成!





病理診断

顕微鏡で標本を観察します。必要な場合は追加の染色や遺伝子検査も行い、総合的に病理診断を行います。



正常組織　がん組織

在浜松ブラジル総領事館に行ってまいりました!

病院長　竹内 裕也





浜松市には現在約１万人のブラジル人が生活されていますが、昨年病院長を拝命してから一度、浜松市元城町にある在浜松ブラジル総領事館にお伺いし、本院のご紹介をしたいと考えておりました。実は私、これまでブラジルに５回行ったことがあり（学生の時には熱帯医療実習参加や現地医学生との交流、医師になってからは学会参加や招請講演など）、個人的にブラジルが大好き、ということもあります。このたび念願かないまして2026年７月８日に総領事館を表敬訪問してまいりました。

総領事臨時代理のクラーク・ジウサンドラ様はじめ、副領事、職員の方々が温かく出迎えてくださり、FIFAワールドカップや諸々の話題で大変盛り上がりました。AI翻訳のポルトガル語のスライドを駆使して、本院のご紹介や受診案内をさせていただきました。総領事館の皆さんは本院の先端医療や地域貢献につきまして大変好意的にご理解くださり、市内のブラジル人コミュニティに周知してくださるとのこと、また将来的には一緒にさまざまなイベントを検討しましょうということになりました。

今回大変貴重な経験をさせていただきましたが、病院案内のポルトガル語版はおろか英語版もないということで、本院として改善すべき点も認識いたしました。今後も本学附属病院の地域貢献とブランディング向上のために努めてまいります。引き続きご指導賜りますようよろしくお願いいたします。



迷惑行為の防止に関するお願い

本院では、患者さん・ご家族・スタッフの安全と安心を守るため、迷惑行為を一切容認いたしません。迷惑行為が確認された場合は、診療のお断り（強制退院を含む）、敷地内立ち入り禁止、警察への通報などの対応を行います。

迷惑行為の例

- 他の患者さんや病院スタッフに対する暴力・暴言・大声・ハラスメント
- 他の患者さんや病院スタッフのプライバシーを侵害する行為
- 病院スタッフに理不尽な要求をする行為
- 長時間の居座る行為
- 何度も電話をかける行為
- 病院敷地内への危険物の持ち込み
- 建物・設備等を破損する行為
- 本院の社会的信用を失墜させる行為
- インターネットなどでの名誉毀損、病院スタッフのプライバシーを侵害する情報の発信
- 病院敷地内での喫煙（電子タバコも含む）・飲酒（ノンアルコールも含む）・営業・勧誘活動
- 病院敷地内での無断撮影・録音
- 診療費等の長期滞納
- 診断書等に事実と異なる内容への書き換え要求
- その他本院の診療機能を低下させる行為や本院のルールから逸脱する行為



最善の医療を提供するためにも、なにとぞご理解のほど、よろしくお願いいたします

医療福祉支援センターニュース

かけはし

人と人、
医療と地域をつなぐ
「かけはし」を復活

医療福祉支援センター
ホームページ

脳卒中・心臓病等総合
支援センター
ホームページ

脳卒中・心臓病等総合支援センター
『ハートの日』ライトアップについて





8月10日が810（ハート）と読めることから、日本心臓財団が1985年にこの日を『健康ハートの日』として提唱しました。

脳卒中・心臓病等総合支援センターでは、この日に合わせて全国で展開される赤色ライトアップ事業と連動し、浜松城の赤色ライトアップを実施しました。

また、本院では初の試みとなるプロジェクションマッピングを行いました。本学先端医療情報学講座の小俣敦士先生に動画を作成していただき、屋上と正面玄関の2か所で無事に投影することができました。









イメージキャラクター

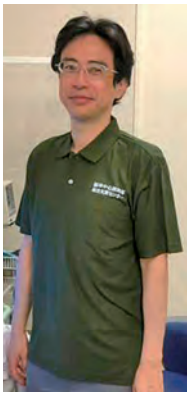
浜松医科大学 先端医療情報学講座 特任助教
小俣 敦士 先生

私自身も、今回の企画を通じて『健康ハートの日』を知りました。プロジェクションマッピングをご覧になった皆さんにとっても、健康を少し身近に感じるきっかけとなっていればうれしく思います。



小俣 敦士 先生（右端）

『ハートの日』SNAP













おそろいのポロシャツで、イベントを盛り上げました！

今後の予定

10月
- 世界脳卒中デーライトアップ
- 地域連携Webセミナー

11月1日(日)13:00~
- 脳卒中・心臓病等総合支援センター県民公開講座
  会場：アクトシティ研修交流センター4階フロア

イベントに関する詳細はホームページで随時お知らせします。

イベント レポート

EVENT REPORT





7/14(火)

サマーコンサートを開催

本学学生管弦楽団によるサマーコンサートを開催しました。さわやかな音色が会場を包み、来場した患者さんや医療関係者は心和む時間を満喫しました。温かな拍手が響くなか、演奏を通して誰もが笑顔になる交流となり、夏の素敵な思い出を彩る、心温まる特別なひとときとなりました。





7/30(木)・31(金)

親子で学ぼう!感染対策2026
~身近に潜む細菌を見てみよう~ を開催

感染制御センター主催の「親子で学ぼう！感染対策2026」を開催し、小学４～６年生の親子16組38名が参加しました。細菌培養や顕微鏡観察、手洗い実習などを通して感染対策への理解を深めるとともに、微生物や科学への興味・関心を育む有意義な機会となりました。

地域連携Webセミナーのご案内（医療従事者向け）

診療科長の先生を中心に、本院の特長とも言える診療内容を紹介しております。
各医療機関の皆さんのご参加をお待ちしております。(12月の開催はありません)

開催回	開催日時	講　師	申込締切
第59回	10月28日(水) 19時00分～ 20時00分	 脳神経外科学講座　助教　神尾 佳宣 先生 地域で支える脳卒中診療 ～急性期から予防までの最新知見～	10月27日(火)
第60回	11月18日(水) 19時00分～ 20時00分	  総合診療内科　特任教授　井上 真智子 先生(左) 演題未定 総合診療内科　特任助教　本田 優希 先生(右) 演題未定	11月17日(火)
第61回	2027年 1月20日(水) 19時00分～ 20時00分	  精神科神経科　公認心理師 遠藤 ゆうな 先生(左)　原田 勁吾 先生(右) 慢性疼痛への心理的対応	2027年 1月19日(火)

事前申し込み方法： メールまたは申し込みフォームにてお申し込みください。
詳細は本院ホームページ（地域連携Webセミナー）をご確認ください。

お問い合わせ： 地域連携Webセミナー担当事務局（地域連携室内）
電話：053-435-2637　FAX：053-435-2849　（平日8：30～18：00）
E-mail：tiren-seminar@hama-med.ac.jp

【お詫びと訂正】 前号（第63号）の表紙Contents欄および8ページに掲載した名称に誤りがありました。
正しくは「地域診療教育システム開発センター」です。お詫びして訂正いたします。

発行／浜松医科大学医学部附属病院広報推進委員会
〒431-3192 浜松市中央区半田山1丁目20番1号　TEL.053(435)2111(代表)　FAX.053(435)2153(医事課)　Hpアドレス／https://www.hama-med.ac.jp